

小学校英語教育実施における日本の英語教育の展望

—国際理解の実現を中心として—

坂本育生 [鹿児島大学教育学系 (英語教育)]

An Outlook on English Education in Japan for the Implementation of Elementary School English — Focusing on international understanding —

SAKAMOTO Ikuo

キーワード：小学校英語教育、国際理解 (ユネスコ教育勧告)、英語4技能、英語資格検定試験

(はじめに)

いよいよ2020年度より小学校英語が正課として導入されることとなり、学習指導要領も公表された。これにより従来の英語教育が抜本的に変わる可能性があると同時に、教育現場における様々な問題が起こると予想される。本研究では小学校英語の導入における影響、英語資格検定試験、鹿児島県内での小学校英語活動の事例等を挙げて小学校英語と日本の将来の英語教育について論じていくが、1974年のユネスコ総会で採択された「国際理解、国際協力および国際平和のための教育並びに人権および基本的自由に関する勧告 (ユネスコ教育勧告)」の原点に返って改めて国際理解の実現を強調したい。

1. 英語教育の在り方と今後の展望

国際化という言葉が独り歩きしていたのはもう昔のことで、日本はもはや世界基準の波にもまれつつある。事例としては、日本の市場における機械、電子産業等は既に頭打ちとなっている部分もあり、大企業などの部門売却が話題となっている。シャープや東芝等などがいい例である。このような現状の理由は様々であるが、日本人が世界に視線を向けず、マーケットの状況に対する調査不足の面もあると思われる。特に日本人は総じてコミュニケーションを取る際に消極的と言われ、自分の意見を述べないことが多いと言われてきた。その改善策として、現在は高校までにプレゼンテーションの訓練や指導を受けつつ、自己の考えを述べる機会が設定されてきた。

英語に目を向けると、英語を学ぶことと使うことは同じようで異なるものだと言える。それは試験を解くための英語と、実務を行うための英語の違いがあるように思える。従来の英語教育が主として「読む、書くこと」に重点を置いてきたため、「聞くこと、話すこと」に対し苦手意識をもつ日本人が多いのは周知の通りである。また本来言葉の持つ機能が一部分に限定され、テストなどの目的で焦点化されたことが一因だとも言える。

英語教育は第2次世界大戦後、外国語を学ぼうという意欲の元、ラジオの英会話などでブームと

なり、多くの日本国民が音読をする姿が見られた。しかしその後、有名大学に進学することでよりよい人生を送れるという考えのもと高学歴を求める風潮となり、英語学習はペーパーテストでよい点数を取るために読む、書くことを中心とした英語教育に変わっていき、学生はそれを受け入れてきた結果、コミュニケーション能力が犠牲になったことは否めない。1990年代以降、コミュニケーションを重視した使える英語を意識することとなり、聞くこと、話すことに時間が割かれることとなってはいるが、実際の大学受験を中心とした英語教育では、残念ながら実用的な技能はおろそかにされてきた。

現状改善の手段として、2020年度の小学校英語教育の導入以降は、4技能をまんべんなく学び、かつ英会話コミュニケーションが重視されることになるであろう。日本人が海外に向けてメッセージを発信していくためには、何としても国際語としての実用英語能力が必要となる。教科としての小学校英語導入は、そのための布石となることはできるが、解決が難しい多くの問題が残っている。

2. 正課としての英語教育

2020年度からの小学校英語教育の導入がどのような影響を与えるのか、その議論は現在行われているところで行われている。全体的にみると反対意見が多いように思われる。たとえば毎日新聞(2016年9月16日、電子版)のアンケート調査では、調査サンプル数は100人と少ないが、半数近くの現職の小学校教員が、小学校英語に対して否定的であり、懸念を示す結果となっている。また、英語を使って仕事ができる基準とされる英検準1級習得者は、高校英語教諭と比べて一段と少ないのもその一因として考えられる。さらに一定の基準の力を持つ教員が少ないということと同時に、英語そのものの教授法が変化していくことに不安を感じているのは当然であろう。ただ2020年度に英語が評価を受ける教科として導入される以上、現場自体の変化が必要となるのは言うまでもなく、それに応じて英語教育が変わっていくのは想像できる。

文部科学省によると、2020年度から始まる次期学習指導要領の全面実施に先立って18年度より外国語活動の時間に総合的な学習の時間を年15コマまで振り替えてよいとの見解を示した。具体的には、小学校5年次、6年次には現在の英語授業数35コマから50コマに増やすことが可能となった。現在これらの導入に関して様々な議論が起こっているが、2020年に施行された際には小学校3、4年で年35コマ、小学校5、6年では70コマの外国語活動が実施可能となる。

しかしながら、小学校で学ぶ学習項目は国語、算数、将来教科化される道徳等、英語以外にも非常に多いので、当然ながら現場での混乱が起こるであろう。さらに上記で述べた英語力の問題に加えて、教員養成、小学校教諭の技術向上の時間などの確保は困難であると予想される。朝日新聞(2014年11月20日)によると、英語力を持つ基準となる英検準1級、TOEIC730点以上の資格を持つ高校教員、中学教員の数、それぞれ53%、28%にすぎず、国が目標としている75%、50%には届いていない。鹿児島県においては、高校教員45%、中学教員27%しか上記の基準を満たしておらず、全国平均よりも低い数値となっている。もちろんこれらの基準を

超えれば英語力および英語教授力が保証されるわけではないが、ひとつの目安として扱うことは重要である。

3. 英語2技能教育から4技能教育へ

日本人の英会話力が極めて低いのはよく言われている。特にそれがコミュニケーション能力に関連しているため、現在の教育の現場ではプレゼンテーションやグループディスカッションを重視する傾向が強い。例えば鹿児島大学では、共通教育の英語の授業の中で、学生たちにプレゼンテーションの実技を課しており、学生達も四苦八苦しなうら取り組んでいる。もちろん即効性はあるとはいえないが、そのような経験を積むことで、自己の意見を主張する力を養っていくことは出来るようになるのではないかとと思われる。さらに実際に英語で話す時も意見を述べるためには論理性が必要で、ディスカッションやディベートを通して、その組み立て方を学ぶ必要があると考えている。

主に英語力を読むこと、書くことで評価してきた従来の日本の英語教育から、それこそ対人コミュニケーションを前提とした分野が加わることが、どのような影響を及ぼすのかは簡単には予想できないが、2020年度から始まる新英語教育以後、長期間にもわたっての追跡調査が必要であろう。ITが発達し、学生たちはSNSでのやり取りが多くなった現在、コミュニケーションの在り方は変わってきている。その影響も考慮し、今後の日本の英語教育の展望を見つめる必要がある。

4. 民間資格の英語教育への導入

大学センター試験に英検等の民間英語資格が導入される見通しとなり、受験者が学生を中心に増えているようであり、検定試験にも様々な変化が見られる。例えば、英検は2016年度に評価法を一新し、4技能に関して一定の点数を取らないと合格できなくなっている。例として、英1級の場合4技能の合計スコアは2500点であるが4技能ごとに625点ずつ割り振られ、すべての技能でおおよそ7割超えなければ合格となくなっている。従来のように苦手な分野を得意な分野で補うことができなくなったということでもある。これにより4技能をより正確に判断できるようになり、実力を測ることができるのは好材料であると言える。またTOEICリスニングテストにおいても、従来のダイアログ、モノログに加えて、2名以上の会話問題が導入されている。大学での単位修得にも採用され、鹿児島大学でも英検、TOEICの一定以上のスコアで共通教育2単位、4単位の単位修得が可能となっている。このような流れのもとに、TOEICや英検の資格習得を重視した塾や予備校、英会話学校も増えてきている。

筆者は長年に渡って英検準1級、2級、準2級、3級の面接委員を務め、またTOEFL、TOEICのスーパーバイザーの経験もあり、民間英語検定資格に関しては概ね好意的である。もちろん資格だけにとらわれてしまっはいけないが、英語学習のきっかけ、向上には優れた動機づけになると考えている。TOEICは現在多くの大学で講義されているが今後も需要は増えると思われ、鹿児島大学でも多くの学生がTOEICの講座を受けている（注1）。

ただ各種検定試験の導入にも問題があることは明白である。英検、TOEICの場合でも、話すこ

とに関しては不十分なものであることは否めない。2020年度からの英語教育では当然のことながら聴くこと、話すことがさらに重視されていくため、読むことに比重が置かれている現行の試験では、正確な英語力は測れないのではないかと思われる。英語学習においては日本国内では話すことの学習は圧倒的に足りていないので、その時間の確保が小学校英語から続く最新の英語教育につながっていけば幸いであろう。

5. 小学校英語に対する反応

小学校英語が実施されてからある程度の年数が経ち、小学校での授業が日常の物となってきた。学生たちも戸惑いながらも受け入れてきたのではないかと思われる。全国的な評価としてはまだ詳しいデータは出ていないが、ベネッセ総合教育研究所(2017)が行った全国の中学1年生へのアンケート調査による結果はやや否定的な意見が出ている。継続調査の結果では「小学校英語は中学で役に立つ」と答えた学生は82.6%であったが中学1年次には53.9%まで減ったということである。様々な原因が考えられるが、一つには英語学習と試験英語の間の連携の問題あると思われる。そもそも小学校英語は「英語に親しむ」ことが中心であって評価の対象ではないが、中学校以降は点数評価される「教科」となるため学生体も意識を変えなくてはならなくなり、結局は点数で英語力が決まる環境になっているのではないかと思われる。中学生になると嫌でも受験を意識しなくてはならなくなり、現在ではフリースクールを含め学び方も変わりつつあるが、まだ現行の受験制度に基づく教育は続いている。小学校英語を有効に活用するためには、授業で会話や英作文などを取り入れていくことが必要ではないかと思われる。

6. 鹿兒島県での小学校英語教育の取り組み

全国的にも小学校英語教育はさかんとなり、様々な取り組みが行われているが、鹿兒島県でもほぼ100%の小学校で総合的な学習の時間における国際理解の一環としての「英語教育」行われている。特に鹿兒島大学教育学部附属小学校では、2015年度から「教育課程特例校 外国語」の文部科学省指定を受け、学生が英語に接する機会が限られた中、英語でのコミュニケーションが必要となる相手や場面を想定して自国、他国の言語や文化を体験的に理解することの重要性から台湾との英語交流を続けており、2020年度からの小学校英語教科化に向けての準備を行っている。

また鹿兒島県薩摩川内市では平成18(2006)年度より「英語力向上プラン」を始めている。このプランでは、小学校で複数の先生が授業を行い、英語のみのサマーキャンプ、全中学生の英語検定試験の無料化、中学生対象の英語スピーチコンテストなどを行っている。

これらの取り組みがすぐに全国の小学校英語教育に影響を与えるわけではないが、今後の日本の様々な小学生が、国際理解の一環としての英語を学ぶ事例として活用されることを期待したい。

7. 国際理解のための英語教育

ゲーテの格言に「外国語を知らない者は、自分の母国語も知らない。」という一節がある。つま

り外国語を学ぶことは、未知の文化を知ることであり、同時に自分の母国語を客観的に捉えることにも役立つ。実際に外国の文献を読むときは、翻訳されたものを読むよりも、その国の言語で書かれたものを読む方がいいことは言うまでもなく、コミュニケーションの重要性がうたわれ、外国人との対話が日常になりつつある現在では、知識だけでなく、直接情報を聞き出すことも必要であろう。言語は学問的な面もあるが、本質的にはコミュニケーションのツールとしての面もある。

21世紀の世界は大きく変動しており、もはや日本人が日本だけで生きていくことは難しくなっている。つまり、日本は一国で成り立っているわけではなく、他国との協調で成り立っていることを第一に考え、連携をとるという意味でも英語や他の諸外国語を学び、さらには国際理解を深めていくことが重要であると思われる。

8. 終わりに

英語教育はいくつかのうねりの中様々に変化してきた。2020年度以降の英語教育の変化は今のところ予想が困難である。おそらく英語コミュニケーション能力の向上が目的とされるであろうが、肝心の学力が改善するかどうかは明確ではない。筆者が勤務する鹿児島大学の学生の英語力に関しては、ここ数年アンケートデータ(坂本、2016)を取りその傾向を探ってきたが、残念ながら、年々英語を苦手とする学生が増えてきている傾向がある(注2)。また同様に中高一貫校での調査(2016)でも、苦手意識がある学生が多数出ていた(注3)。その原因に関しては、憶測の域を出ず、新しい方法での英語教育が望まれているのは事実であり、小学校英語がその解決の糸口になる可能性はある。しかし、小学校の教員数、教員の英語力と指導力、教科化までの準備など様々な問題が山積みである。2020年度からの小学校導入は私見としてはやや時期尚早であるように思われるが、2020年の2回目の東京オリンピックを控えての絶好期であるので、将来の日の英語教育の重要な「転換期」となることを望みたい。

(注)

- 1) 著者が夏休みに開講しているTOEIC教材を使用した実用英語講座では、毎年50名あまりの受講生があるが、その半数以上は理系学生である。
- 2) 主に工学部、理学部の理系学生に対しての調査である。詳細は参考文献を参照。
- 3) 一般に、中学卒業から高校にかけて苦手意識を持つ学生が増える傾向が見受けられた。詳細は参考文献を参照。

参考文献

- 坂本育生、「中高一貫私立学校における現代英語教育の意識調査研究－学生の得意苦手意識を中心として－」鹿児島大学教育学部実践紀要、第26巻、2016
- 坂本育生、「鹿児島大学の理系学生の英語学習傾向の研究(1)」鹿児島大学教育学部研究紀要、第67巻、2016

- 坂本育生. 「ESP教育の研究と開発－海事英語を出発点として(Ⅱ)」－ 鹿児島大学言語文化論集 (VERBA)、2013
- 坂本育生. 「ESP教育の研究と開発－海事英語を出発点として」 鹿児島大学教育学部実践研究紀要、No. 22、pp. 83 - 90、2012
- 坂本育生. 水産学部専門英語に関する基礎研究 鹿児島大学言語文化論集 (VERBA)、No. 35、pp. 37 - 48、2011
- 根岸雅史、酒井英樹他. 中高生の英語学習に関する実態調査2014、ベネッセ教育総合研究所、2014
- ベネッセ. 「中1生の英語学習に関する調査」ベネッセ教育総合研究所、2017
- ベネッセ. 「小学生の英語学習に関する調査」ベネッセ教育総合研究所、2015
- 文部科学省. 小学校学習指導要領解説、外国語編、2017

Appendix

小学校 外国語 (5・6学年)【平成29年改訂 学習指導要領】

目標

- (1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。
- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

英語の目標と活動

(1) 聞くこと

- ア ゆっくりはっきりと話されれば、自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるようにする。
- イ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、具体的な情報を聞き取ることができるようにする。
- ウ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えることができるようにする。

⇒【聞くことの活動】の活動

ア 自分のことや学校生活など、身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を聞いて、それらを表すイラストや写真などと結び付ける活動。

イ 日付や時刻、値段などを表す表現など、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、具体的な情報を聞き取る活動。

ウ 友達や家族、学校生活など、身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現で話される短い会話や説明を、イラストや写真などを参考にしながら聞いて、必要な情報を得る活動。

(2) 読むこと

ア 活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができるようにする。

イ 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味がわかるようにする。

⇒【読むこと】の活動

ア 活字体で書かれた文字を見て、どの文字であるかやその文字が大文字であるか小文字であるかを識別する活動。

イ 活字体で書かれた文字を見て、その読み方を適切に発音する活動。

ウ 日常生活に関する身近で簡単な事柄を内容とする掲示やパンフレットなどから、自分が必要とする情報を得る活動。

エ 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を、絵本などの中から識別する活動。

(3) 話すこと [やり取り]

ア 基本的な表現を用いて指示、依頼をしたり、それらに応じたりすることができるようにする。

イ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする。

ウ 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。

⇒【話すこと [やり取り]】の活動

ア 初対面の人や知り合いと挨拶を交わしたり、相手に指示や依頼をして、それらに応じたり断ったりする活動。

イ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを伝えたり、簡単な質問をしたり質問に答えたりして伝え合う活動。

ウ 自分に関する簡単な質問に対してその場で答えたり、相手に関する簡単な質問をその場でしたりして、短い会話をする活動。

(4) 話すこと [発表]

ア 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。

イ 自分のことについて、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。

ウ 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、

簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。

⇒【話すこと〔発表〕】の活動

ア 時刻や日時，場所など，日常生活に関する身近で簡単な事柄を話す活動。

イ 簡単な語句や基本的な表現を用いて，自分の趣味や得意なことなどを含めた自己紹介をする活動。

ウ 簡単な語句や基本的な表現を用いて，学校生活や地域に関することなど，身近で簡単な事柄について，自分の考えや気持ちなどを話す活動。

(5) 書くこと

ア 大文字，小文字を活字体で書くことができるようにする。また，語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。

イ 自分のことや身近で簡単な事柄について，例文を参考に，音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。

⇒【書くこと】の活動

ア 文字の読み方が発音されるのを聞いて，活字体の大文字，小文字を書く活動。

イ 相手に伝えるなどの目的をもって，身近で簡単な事柄について，音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句を書き写す活動。

ウ 相手に伝わるなどの目的を持って，語と語の区切りに注意して，身近で簡単な事柄について，音声で十分に慣れ親しんだ基本的な表現を書き写す活動。

エ 相手に伝わるなどの目的を持って，名前や年齢，趣味，好き嫌いなど，自分に関する簡単な事柄について，音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いた例の中から言葉を選んで書く活動。